

北海道のイメージ

(『稲と流氷——北海道の植民地化と文化変容』所収、第7章)

オギュスタン・ベルク *
(荒又 美陽 ** 訳)

Augustin BERQUE

La rizière et la banquise : Colonisation et changement culturel à Hokkaidô

Publications Orientalistes de France (Paris, 1980) より Chapitre sept: L'image de l'île

を著者の了承を得て訳出。〔 〕内は訳注。

社会が考えていることと、社会がそうであることとの間には、時間的・空間的不一致がある。時間的というのは、社会的変化への心性の調整には常に時間がかかるためである。また空間的(あるいはトポロジック的)というのは、その調整は不完全だからである。心性は、社会的現実が知覚される範囲——つまり、ある文化、あるいは特にあるイデオロギーの用語の中で分類され、検討され、再創出された範囲——でしか社会的現実に関係していないような、固有の場で変化していく。

この章の目的は、日本社会による北海道の植民地化の過程において、この心理的なものから社会的なものへの調整が行われたある種のメカニズムを検討することである。別の言い方をすれば、この社会が占領前にこの島に対して抱いていたイメージが、どのようにして現在抱いているようなイメージに変化したのかということである。日本社会は社会的には日本のものとなったこの島をどのように心理的に適応させたのか。そして日本人が、かなり以前から社会経済的には日本の空間として統合されていた北海道を、〔現在まで〕切り離された別個の空間として考え続けている発想はどこから来ているのだろうか。

北海道は他とは異なるという考えの源流へ

日本文化のなかにおける外部

北海道という島のはっきりとした植民地化は、それが明治時代に本当に始まるということから、日本国民の歴史の中では最近のことである。しばしば提起される疑問として——そして大量の歴史研究が明らかにしてきた疑問として——、なぜ明治の日本は北海道を植民地化したのかというものがある。そこ

には二つ目を付け加えなければならない。なぜ明治以前の日本は北海道を植民地化しなかったのか。というのも、本州のもっとも北の部分は1000年も前に植民地化されたのである。日本社会のいくつかの挿木は、鎌倉時代(12世紀の終わりから14世紀のはじめ)から北海道の南岸地域に根を出していた。そして15世紀には、コシヤマインの乱と呼ばれるアイヌの反乱を叩き潰すことによって、日本の軍事力の優越が決定的に証明されていた。では、なぜ東北と北海道の植民地化の間には1000年の時が流れたのだろうか。

共通した考えは、日本社会が日本の他の地域とあまりに異なる北海道という環境を活かすだけの技術的な手段を持っていなかったというものである。というのも、特に、寒さはこの社会の物質的な基盤である米の耕作を阻んだからだというのである。

この解釈は見かけよりも偏向している。上述の如く、津軽海峡の両側の気候的な違いはごくわずかである。そして気候は渡島半島の西岸については東北の北東岸よりもむしろ好ましくさえあった。そのうえ、日本の農業を米作に限定するのは極端である。実際、開拓それ自体が示したように、日本の伝統的な畑作のかなりの部分は北海道できちんとうまくいっている。植民地化の過程において西洋の技術の付加がいかに必要であったかなどということは、これから見ていくように、明治政府の下で進められた政策を正当化する神話に過ぎない。

説明は別にある。日本社会において、なぜ実質的に可能であった植民地化にもっと早く取り組む動機が生まれなかったのかを見つけ出さなければならない。

内地においては人口的な圧力が移民送出のプッシュ力を生み出すのに十分ではなかったのか。確かにそうだが、この移民送り出しのプッシュ力の欠如

* Directeur d'études en retraite à l'École des hautes études en sciences sociales

** 明治大学

がそれ自体問題である。実際のところ、日本社会は昔から非常に人口密度が高かった。また、この社会は静態的な社会では全くなかった。逆に、その構造は個人がかなりの地理的な移動をすることに向いていた。家屋と土地はすべて長男に受け継がれ、兄弟たちが家を出るという実践は（別の家族に養子に出されるか、自分の親の小作の地位に落ちるのでなければ）、本家の外での分家の繁栄を生みだしていた。このメカニズムは昔の日本において江戸時代の広範な開墾を支えており、北海道の植民地化を強く促したはずであった。

他方で、個人の移動性も人口密度も、北海道への特筆に値するような移動は引き起こさなかった。それで明治の前夜、本州と四国と九州で29万4千km²に3400万人の人口、言い換えれば115人/km²の人口密度を抱えていたのに対し、北海道は7万8千km²において人口密度が1人/km²しかなかった。そのうえ、実質人口密度(人口/技術的に居住可能な面積)は、昔の日本においては1650年ごろで212人/km²、1850年ごろには400人/km²となっており、つまり現在のフランス(127人/km²)やイギリス(248人/km²)、西ドイツ(351人/km²)の対応する数字を超えているのだ。日本は今日では北海道を入れても1000人/km²を超えている。

近代工業化以前の社会として驚異的なこの人口密度こそ、なぜ移民送り出し圧力が不十分であったのかを示している。日本社会は非常に密であることに適しており、そうなりがちであったのだ。空間構成を変えていく力は、日本文化においては、人間の支配力を強める方向に向かっており、この支配力を地理的に広げる方向へは向かっていなかったのだ。

この内部化する傾向は、土壌の生産性の優位に立脚している。それは西洋社会の外部化する傾向とは逆である。こちらの方は労働生産性の優位の上に展開している。(土壌の生産性の相対的な劣位を地表を広げることで補っている。)

それはもちろん、傾向が対照的だということであって、絶対的な二律背反ではない。しかし、たとえこのような傾向がすべて相対的であったにせよ、それぞれの地理的な表現は明瞭に特徴づけられている。その証拠に、日本という事例においては、人間の支配力の一貫性の欠如がある。このあまりに人が多い列島において、人は今日でも領土の3分の2を森林のままにしており、その4分の1は人間の活動による影響を受けない地のままなのだ。南西部の日本と北東部の日本の高地の利用の間にあるコントラストは、起伏や気候の条件のコントラストよりずっと強

力にあり、この一貫性の欠如を説明するのが自然的要素ではなく文化的要素であることを示している。相関的に、人間によって支配された場所は、伝統的には社会の動態性を内部化する傾向を支えるように価値づけられた対象であった。10世紀から、日本は1ha当たり12キンタル[1キンタル=100kg]に匹敵する米の生産量を得ていた。つまり、今日の第三世界の多くの国のそれを上回っている。そして、18世紀には、1ha当たり25キンタルとなっていた。1974年にインドは16キンタル、中国は32キンタルであるのに対し、1975年の日本は62キンタルとなっている。

この全体的な傾向こそ、明治より前の時代に、日本社会が北海道への特筆すべき移民送り出しをしなかったことを根本的に説明するものである。また同様に、このために後における海外への移民送出は政府の目標以下に常にとどまり続けることになる。

このような継続性は、移民送出の弱さを説明するのが制度的な道具立て(明治より前の時代の封建的な区画)だけではないことをよく証明している。もちろん、それは社会の内部化する傾向を明示し、また強化したのではあるが。

この傾向は空間の表象の分野において内部と外部の強力な差別を培っている。中/外の組み合わせは確かにあらゆる心性に存在している。しかし、その二つの語の間の関係の質は文化によって異なる。日本文化においては、中(ウチ)は外(ソト)との関係によって非常に価値づけられている。それは本質的な指示対象であり、主体の存在自体の条件である。日本語においてウチという一つの語は内部、話し手、家、グループを示しうる。同様に、この「中」のなかに、たとえばフランス語やフランスの心理空間から見れば、非常に異なる概念や価値が積み上げられている。ウチの領域においてはこのトポロジー的な差異が不在であるか、非常に弱いようなのだ。言ってみれば、それは唯一の境界において移転と蓄積をすることによって、ウチ/ソトのトポロジー的な差異を強化している。ソトはウチが持つ慣習的(つまり標準的)な表象の領域から排除されている。それは同化できない秩序に属している。当然のこととして、ソトによる理解不能な秩序である。このトポロジーは日本の特殊化する傾向を持つ思考の基盤となっており、それは西洋の一般化する傾向を持つ思考とは非常に異なっている。そして特に、こういうものはこの分野に属しており、別のものはそこから排除されるというような、現実の知覚を秩序付ける分類上の区分の強さの基盤にもなっている。後に一つの例を検討したい。北部でロシアの存在が知覚されるのはその仕

方である。また〔日本では〕、ソト、外国に直面すると、コミュニティの内部と外部の言い分は通じないものだということが常に引き合いに出されるという事実がある。そして、ウチではあらゆる気遣いが物を言うが、ソトではなにも課されない。

非常に簡潔に記述してきたこの心理構造は、日本の空間構成の根本にある。それは人間によって整備された場所(ウチ)とされていない場所(ソト)を分ける強い対照のなかに透けて見える。それはまた、北海道の外部性(ソト)が心理的な面において過度に強調され、その結果、何世紀もの間、日本社会は物質的な面においては十分に同化できたこの空間の同化に着手しなかったという事実が明らかになる。そして、現在でも、戦前にはよく用いられた「内地」(内部の土地)という言葉が、多くの場合に北海道との対照をもって古い日本を価値づけ続けている。植民地時代には、「内地」は日本語ではフランス語で「本国(Métropole)」と言う場面で用いられた。しかし、「本国」が系列を意味しているのに対し、「内地」は(「外地」・外の土地との)分断／対抗を意味している。

そもそも北海道がこうむってきた差別の強さは、歴史を参照せずには理解されえない。

日本の歴史における東と北

日本の歴史は、いくつかの点において、だいたい飛騨山脈、木曾山脈、赤石山脈——つまり名古屋と能登半島をつなぐ線の少し東——と合致するほぼ南北の領域によって慣習的に定義づけられる、西と東の構成要素の交替と補完性によって構造化されている。

縄文文化は主にこの領域の東で繁栄した。しかし、弥生文化が浸透したのは西からである。大和王朝は西日本で成立した。しかし権力は次には東に移り、鎌倉となる。小休止(室町時代)がそれを西に持っていく。そして江戸時代は、現在の東京を中心としていた。

文化的には、西日本と東日本はいくつかの特殊性によって異なっており、非常に大雑把には、次のようなイメージでまとめることができるだろう。西はより洗練され、より開放的であるのに対し、東はより粗野で、より閉鎖的である。

このイメージは、決定的な歴史的現実と根差している。単一の日本国家の中における(北海道を除く)大きな三つの島の統合は、古代国家による西日本の統合に数世紀遅れた。それはこの国家による本州の東と北の軍事的な征服の困難によって起こったものである。最初の征服に対する蜂起を考慮すると、西

による東の政治的軍事的な統合は、権力が東、鎌倉に転換した時(12世紀の終わりから14世紀の半ば)にようやく達成されたと言える。古代の9世紀の間、日本国家の民は少しずつ服従させた東や北の民族との紛争の脅威の下で生きたのだ。

このような争いの波乱は、古事記や特に日本書紀のような史記によって美化されている。それらの史記は、中国の北方民族との好戦的な報告が載った歴史書に部分的には影響を受けている。その様式がどのようなものであれ、本州の東と北の征服は、こうして、集合的な表象のなかでは、野蛮に直面した文明の叙事詩となり、第二次大戦の時まで、公式なイデオロギーによって永続していた。軍事的政治的な力関係を(この主題では古典的なやり方として)自然面に移転させることによって、(日本社会が民族の混合の上に設立されたまさにその時に)古代国家の敵対者は非日本人として差別された。東や北の民族は、中国の年代記をモデルとして、帝国の東に位置する蛮族と名指される表意文字によって示された(それが日本の歴史上最初の言及である)。日本語ではイあるいはエピスと読むこの表意文字は、古代国家が少しずつ征服したこの「東の未開人」を意味する「東夷」に適用された。

東の民族と野蛮さの同一視は、明治まで、東北を指し示す用語に引き継がれた。「みちのく」、つまり「奥の国」、遅れて「後退した地方」を意味する言葉で、行程の最も奥を意味している。

鎌倉幕府を通じた将軍政治の機構は、794年に東への遠征を請け負った「蛮族征服の総司令官(征夷大将軍)」の機構に起源を持っている。しだいに明治より前の体制に典型的に適用されるようになった「幕府」という言葉それ自体が、もともと「司令部」——東に進められる遠征の司令部——を意味している。

このような状況がこれらの野蛮あるいは未開とみなされた民族にはあり、どの民族を指しているのかを確信を持って見ることはできない。夷、蝦夷、肅慎、そして平安時代の終わりからは蝦夷、彼らを名指す言葉は、おそらく異なる民族に適用されていた。またおそらく、それらは部分的には同義語でもあった。蝦夷という語がはっきりとアイヌ、特にその土地(現在の北海道)を意味するようになったのは中世からにすぎない。音声学的には、「蝦夷」が蝦夷という語と同様にアイヌの語(「人間」を意味するエンジュあるいはエンチュ)の劣化であるというのはありえないことではない。この意味が何であれ、それは日本社会には知覚されえなかった。そして唯一意味を成すのは、この語に適用された書記法は、「野

蛮」を語源とするものだというのである。

この類型的な混同に続いて、北海道とアイヌは、古代国家と東や北の民族の間の千年近くにわたる敵対がにじみ出た否定的な価値を結晶化していた。北海道は、こうして、日本国家の民の心理空間において、反世界、文明の地(華)に対抗する未開の地(夷)として定義された。北の人びとの外観や習俗についてのあらゆる種類の恐ろしい記述は、この神話を涵養し、今日でもそのイメージのいくつかは、制度的ではないにせよ、実際の差別をはびこらせ、アイヌはしばしばその対象であり続けている。

この神話の同化力は、日本人が18世紀の終わりまで、北部へのロシアの到来に対して戦略的な重大さを持つのが遅れるということに典型的に表れた。この未開の空間では、原始的であるか遅れているかしかありえなかったのだ。それは「赤蝦夷」という言葉が示すものであり、その「未開の赤」を意味する語は(制服の色から)長い間ロシアを指していた。

征服された民族(北の民族)による勝者である国家への統合が推し進められたため、このような神話は社会関係の現実を前にして消え去ってもおかしくはなかった。ところが逆に、神話を全く壊すことなく意図的にそれを維持しようとする体制の中で、松前藩によって北海道への日本人の最初の入植が固められていくことになる。

松前藩のイメージ

松前の「藩」は厳格な区切りに基づいていたことを思い出しておこう。その権力から見れば支配は可能であったが、松前藩は蝦夷地を日本のほかの地とは分けていた。島の空間はそれ自体が社会的な面(日本人の地とアイヌの地)と経済的な面(場所請負制による開発独占)においてはっきりとした領域に区分されていた。

北海道が日本人によってもっと早く植民地化されなかった主要な理由の一つがこの体制のなかにある。しかし、松前藩の体制は政治的、経済的、社会的な区切りを立てただけではなかった。これらの区切りは心理的な面においても同様に決定的だったのだ。ある部分のものは考えられた末のことであった。他方で他のものは、社会経済的な区切りによって間接的に涵養されたのだ。

意図的な障壁の最も明らかなものは、北海道の地理を幕府やほかの藩に対して秘密のまま保とうとする松前藩の努力である。18世紀の末に田沼意次が最上[徳内]や他の探検家を蝦夷地やクリル諸島の内部を知るために派遣する前には、幕府はこの島の地図

を一枚しか手に入れておらず、しかも非常に不明瞭なものであった。また松前藩は1688年に快風丸の学術調査に対しあらゆる種類の妨害を行った。新井白石や並河天民、工藤平助、本田利明などの著作は、それでも神話の向こうにある現実を知ろうとしていたが、蝦夷地についての無関心と不正確さが日本を覆っていることを示すのみであった。ついにヴェールが除かれるには、将軍の中央行政による松前藩の排斥もやはり同様に必要であった。

しかし、普及したイメージは、学術的な根拠があってもそれほど簡単には消えなかった。これらのイメージは、蝦夷地の場合、松前藩によって維持されてきたデータの秘匿あるいは選別よりも頑固な障壁となった。それは当然、全体に秩序立っており、ある部分は肯定的でさえあった。たとえば中世から蝦夷地に結び付けられてきた自然の豊かさ(金、鯨)の名声、良く知られた「江戸にもない春」に行われる「松前のにぎわい」。しかし、移民の遅れがそれをよく示しているように、これらのイメージの役割は嫌悪を呼び起こすイメージの役割と比較すると弱かった。後者のなかの多くが今日まで残っている。ほかのものはもはや歴史的価値しかない。最も決定的なものを引いておこう。農業に関わるもので、特に稲作、それが蝦夷地では不可能だというものだ。

ところが文書を繙くと、日本人の到来より前に北海道で農業は行われており、それは島の北部(天塩など)でさえ実践されていた。そのそばで、日本人も15世紀からほぼ規則的に畑を耕していた。確かに、どちらの事例も、耕作の規模は小さかった。しかしそれは、まずアイヌが農業をしなかったと考えることに固執してきたこと、そして江戸時代に一部の人びとが北海道で農業が可能だと考え始めるのに18世紀までかかった(佐藤信淵の偽作)ことを説明するものではない。

神話はしぶとく残っている。北海道で稲作は十分可能だと1世紀以上の間証明されてきた今日でさえ、北海道は米をほとんど生産していない、いずれにせよひどい米だという本州に流布する考え方のなかに透けて見える、上記の神話のしぶとさがある。あるいは1972年に田中首相によってなされたこの発言のなかにもそれが見て取れる。彼によれば、北海道の稲作は「ゼロに減ら」した方が良いという。(彼の北海道訪問を特徴づけた「ゼロ発言」は、非公式であったとしても歴史的である。)

このような神話は明確な起源を持っている。松前藩の統治の間、農業は漁業ほど利益を生まなかっただけでなく、稲作を導入しようとするすべての考え

は制御された。というのも、大阪の商人が確保していた米の供給の独占の力が強かったために縮小されたのだ。アイヌに対して日本人のやり方で農業を行うことを禁止したのも同じ意味においてであろう。他方、十分な規模で稲作が試みられると、つまり明治になる前後には、純粹に自然な選択がなされ、中西部の大平原に水田を始めることをすぐに可能にした。稲作が北海道でもっと早く試みられたなら、この自然な選択がなされなかったと仮定することはできない。稲作が不可能だというイメージが生まれたのは、松前藩の統治が実質的にまさにそれを禁止していたからなのである。そして、この体制は農業収入なしで成り立っていたため、北海道は農業に不向きだとみられていたのである。この心理的な文脈によって、物理的な困難は増幅され、良くない収穫があるとすべて自然秩序による決定的な限界と同様のものとしてみなしてきたと言える。

つまりこれが、北海道が明治まで集合的な表象においては農業外の空間、つまり文化外であり続ける状況を創りだす社会的な論理である。日本人の心性の奥底から松前藩と幕府の間の関係の詳細に至るまで、すべてがこの差別に寄与していた。そして、その結果は植民地化の遅れのみではなかった。この植民地化の様式自体が、そこから徹底的に決められたのだ。実際、北海道は伝統的な技術にとどまっていたは植民地化不能とみなされていたので、明治の指導者たちはこの日本の地をどのように価値づけるかを日本人に教えるために西洋の専門家を呼び寄せることを選択した。そして、その代わりに、この決定は新しい一連の神話を生みだした。それまで野生の空間として外部化されていた北海道は、西洋的な空間としてもう一度外部化されることになったのだ。

北海道の象徴的な占有

アイヌの日本人化／自然化 (naturalisation)

アイヌの日本人化／自然化〔原語はnaturalisation一語だが、アイヌを日本人に組み込むという意味と自然と同一視するという二重の意味を持っている〕は少なくとも二つの面で行われた。制度的な面では、この北海道の先住民は他の日本人市民にあまりによく同化されたため、第二次大戦以降、人口統計上のアイヌとしては消えてしまった。心性の面では、同化はずっと複雑であった。もはやアイヌには別の存在を認めない、つまり日本の「性質」の中に溶け込ま

せる傾向の一方で、彼らの^{ナチュラルリテ}性向を誇張する、つまり彼らを北海道の「性質」、あるいは単に「自然」Natureと同化して見る傾向があった。

すべての植民地を持つ社会において、元は自分たちのものではない領域の専有を正当化するという問題が提起される。基本的には、このような正当化は植民者の文化的な卓越の主張や、被植民者の文化の否定によってなされている。この否定は多様な形式を身にまとっている。あるものは物質的である。たとえば、アイヌの狩猟場が植民地化によって区画に分けられたとき、またアイヌ自身が耕作者へと変貌した時がそうである。またあるものは精神的である。文字通り^{ナチュラルリザンション}自然化されるのはアイヌの方である。なぜなら差別は心理面で「自然なるもの」を対象としており、支配的な社会、つまり「社会」から彼らを区別しながら、「自然」に彼らを近づけがちだからだ。フランス語は意味深いことに、この用法において、術語を一式整えている。indigène(先住民)、natif(出身者)、naturel(土着民)、autochtone(原住民)など、それらは支配された社会の「自然性」を冗長なほど強調しており、支配的な社会の文化度をもって対照させている。日本語でも、土着民、地元、原住民などの用語を持っており、事情は変わらない。この同じ自然化する論理の中で、アイヌは明治政府の下で土人と命名されており、それは「土着の人間」と解しうるものだが、構造的には「土の人間」とも言うものである。

相關的に、公式のイデオロギーは制度を通じてアイヌの社会性を否定する傾向を持つ一連のイメージを発展させ、普及させた。この価値の最も決定的なものは、当然北海道におけるアイヌの存在に基礎づけられたものである。つまり、ある社会が場所を持つ権利である。明治政府がアイヌを「土人」と名指し、「先住民」を意味する「原住民」という良く知られた言葉で呼ばなかったことは偶然ではない。実際、原住民(元の住民の意)は反逆的なものと解釈しうる先行事例を表現するものである。このような先行事例を矮小化し、相關的に日本の主権の古さを主張することが重要であった。この目的のために、第二次大戦までは日本人の子どもに対する歴史の教科書は、景行年間(71-130年)からヤマトタケルノミコトが蝦夷(「蝦夷背きて…」)の「反乱」を制圧しに行ったと教えていた。これらの教科書が採用していたのは日本書紀や古事記の神話であったのだ。今日では、阿倍比羅夫の遠征(7世紀)は歴史的事実であるとみなされているが、彼の物語は想像されたものと考えられている。教科書は、明治から第二次大戦まで、本州北

部や北海道、さらには満州まで（日本がこの地方を植民地化した時に用いられていた教科書の事例では）、それを断定的に位置づけていた。さらに、この遠征は攻撃的ではなく、懲罰的なものとして示されていた。1887年に編集された『小學用歴史』（小学生用の歴史教科書）は、たとえば、田村麻呂の遠征について、彼がいかに蝦夷の部族長の巢窟に入り込み、彼を殺害するのに成功するのかを物語っている。「ついにその巢窟に入りて酋長を誅（ころ）し。」「巢窟」という言葉は「洞窟的な巢」と解せる。「酋長」は文明化されていない民族の場合にのみつかわれる。そして「ころし」（「ころす」は通常の表意文字〔殺〕ではなく、「懲罰的な死」を意味する「誅」で書かれている）。メッセージは明らかで、冗長でさえある…。加えて、蝦夷からアイヌを区別しないために、このように子どもたちに教えられる歴史から、日本の黎明期以来、北海道は日本の土地で、アイヌは反乱の有罪性があるとみられることになる。ヤマトタケルノミコトの遠征を歴史的事実として教えることをやめたのは1946年の教科書である。

こうして、第二次大戦まで、北海道はずっと日本であったという制度的なイメージをすべての若い日本人が持つように刷り込まれた。教科書と制度の改定は、神話を撲滅するのに十分ではなかった。神話はさまざまな支持を永続させるために力を注いでいる。その証拠には、本州の学生に対して1975年に行われた調査（1976年7月9日付北海道新聞より引用）があり、そこでは大部分が北海道という言葉の起源を知らなかったこと、そして一定の人びとが——この島が明治より前には蝦夷地と呼ばれていたことを知りつつ——単に古代国家の地域である「道」とそれを混同していたことがある。つまり「東の海の道」（北海道）などがあったように「北の海の道」（北海道）なのではないかということである。調査対象者のほとんど誰もが北海道という語にアイヌ語起源があるとは考えなかった。もちろん、古代の「道」との同一視は、北海道がそのときから日本国家の一部だという考えにまでは至っていなかった。にもかかわらず、アイヌの大地（アイヌモシリ、すなわち「人間の大地」）は日本人の心理空間にはほとんど存在していない。人びとは無意識にこの島が「野生の地」（蝦夷地）、あるいは「北の海の地方」（北海道）、とは違う形と呼ばれる可能性、つまり日本の呼称ではない名前を持つことができることを否定している。アイヌモシリ（北海道のアイヌ名）は、心性の面で、以前と同様、法的な面でも、*res nulla*〔ないもの〕であり、島の大部分が*res nullius*〔主のいないもの〕、つまり、国家

の財産（無主地国有：主人のいない地は国家の土地である）として扱われてきた。定義からみて、「土地の人間」である「土人」は土地に属している。つまり土地は彼らに属しうるのではない…。

アイヌをより確実に自然に帰すために、公式のイデオロギーは組織的に文化や社会性の属性を彼らに認めないように適用された。既にその神話を引用したように、アイヌは農業をしないというものである。それはあまりに根付いていて、専門家のみしかその誤謬を認識していない。今日の観光客にとって、アイヌは自分たちでは鮭の漁業と熊の狩猟、そうでなければ土産物の製造と販売、あるいは不幸にも報酬に対して行われる舞しか出来なかったことになっている。生産者ではなく、捕食者でしかないという意味で、アイヌは戦前の小学生に説明された形ではほとんど人間と動物を見分けるすべがない人びとであった。小学校の授業のために日本で編集された初めての歴史教科書（すでに引用した『小學用歴史』）のなかでは、蝦夷地の人びとは「冬は穴で、夏は巣で暮らしている」と読み取れる。1903年の版では、彼らは、「男も女も髪を整えず、体を洗わず（…）、読まず、書かず、数を数えない」と強調している。小学生は、1893年に出版された別の教科書の中で言われているように、歴史上の蝦夷という人びとは、今日のアイヌであると教えられている。「北海道に行く機会があったら、君はいまだに文明化されない民族をみることだろう（…）。それはアイヌであり、つまりは蝦夷である（…）。」必要な場合には、教師はおそらく蝦夷という、子どもには少し難解な表意文字の本来の意味を説明することもできたのだ。

この歴史的現実のおおざっぱな変形は、もちろん教育からは消えてしまった。そこでは変形の方がわざと実現されていたのである。高倉新一郎などの『アイヌ政策史』のような研究に根差した、アイヌの歴史を再評価する鮮明な傾向が次第に強調されるようになった。アイヌの側では、日本人に可能な限り同化しようとする欲求——戦前生まれの世代には今でも著しいが——から、文化的独自性の主張へと変化しつつある。そのような主張は、アイヌ民俗学会のような組織の活動によって支持されており、たとえばコシャマインやシャクムシャインの蜂起について、「乱」（反乱）という言葉をも「戦い」（戦闘）に置き換える運動が1974年に起こった。シャクムシャインの叙事詩は、近年、北海道新聞の週刊版に書かれる漫画で再評価されている。大地の祭りのようなある種の習慣は再生されている。理想主義者たちはアイヌの共同体（コタン）を再興しようとしている。グラ

フィティやヴァンダリズムといった行為、あるいはテロリズムさえ、灰の中で火種がまだくすぶっていることを示している。

しかしここで厄介な問題が現れる。いったいどのような作用で、この再主張の波は日本社会自体の変化の産物とはならないのか。そこでは画一化が締め出しという現象を生みだし始める状況に至っている。アイヌ文化に関しては、それは同化の最後の一滴になるものなのか。たとえばアイヌの運動とみなされているある割合の暴力的な行為が、実際のところ、その運動を彼ら自身の政治運動とみなすような根っからの日本人によってなされているのは示唆的である。

ともかく、アイヌが対象になっている道徳的な復権は、戦前の自然化するイデオロギーのイメージを好んで永続させるものである。1973年の5月にテレビ番組で、松前藩の時代にアイヌが日本の商人によって騙されたことが示されたのはそういうことであり、それはメッセージよりもあまりに不合法的やり方であり、表面的には次のようだった。一方で日本の卑しい商人がおり、他方に優しいアイヌがいて、〔それは〕明らかに次のようなものと二重になっていた——一方に文明化された人びとがおり、他方に計算ができない原始人がいる（そしてこの事件はウタリ協会、アイヌの防衛組織から告発され、訂正された）。

自然化は最も害のない外観を持って追究されている。そして、差別が基礎づけられるのはそのような自然化なのである。それは日常生活において常に執拗である。旭川の17の小学校で1973年に行われた調査がそれを示している。小学生の10人に2人がアイヌの同級生の隣に座ることに嫌悪を持っていることが明らかになったのである（1974年10月20日付朝日新聞）。あるいは、ある主要日刊紙の読者からの投稿では、外人、熊、あるいは単純にアイヌなど、横浜の二人の女子小学生が侮蔑を受けたことが報告されている。アイヌに関心を持っている人びとの中ですら、多くはアイヌを博物館の展示物のように意図的に硬直させている。こうして、近年、埼玉県立博物館で行われた展示の開催者は、全く当然のように、彼らに民俗学的な研究のため私物として託されたものを置いていた。さらには、東京の百貨店の広告キャンペーンで、1974年の秋に、北海道物産の販促を行った。そこにはアイヌコタンの首長の美しい写真を見ることができる。他方で、かなり以前から、コタンも首長も存在していない。しかし、北海道を売るには、湖や熊といったテーマと同じ名目で、1975年の

工業化され、都市的な日本において平然とアイヌであり続けている原始的な社会の見かけを使っている…。問題の広告はウタリ協会によって告発された。

日本人がアイヌを自然化するのには、もちろん自然への特別な嗜好によるものではない。別のもの、たとえば、フォドルFodorのガイドブックの『日本』を見てみよう。旅行者は379ページで、あまりに観光化された白老よりも阿寒国立公園にこの「最後のモヒカン族」である「アイヌについて学びに」行くことを勧められているのを見る。この種の例は旅行の本などには豊富にある。アイヌは、植物誌か動物誌のように理解されているのである。そして、彼らを見る（あるいはむしろカメラで見る）のがごくわずかだけであつたにせよ、文明化された視線は科学的なだけではないかもしれない…。

変転を重ねても、支配的な価値にしたがって、先住民を自然に同化することは繰り返され、つまり日本社会によって北海道の空間を物質的に占有するという道徳的な基盤が繰り返し明確化されているのである。

改名された島

地名は、ある社会による空間の占有において本質的な役割を果たす。この占有は複数のレベルにおいて行われ、それは多かれ少なかれ空間についての社会の物質的な影響力につながっている。純粋に非物質的な関係は、たとえば、フランス人がミュンヘン(München)という代わりにミュニッック(Munich)〔フランス語読み〕というときである。より直接的な関係では、占領下において、ドイツの地図がナンシー(Nancy)の代わりにナンツィヒ(Nanzig)〔ドイツ語読み〕と書いていたことである。植民地化と脱植民地化の場所名詞学(toponomastique)は特にこの点においてははっきりしており、歴史上多くの変更が行われ、また関係性も明らかである。

われわれは北海道という名前自体にこの占有の例を見てきた。その完全に日本化された形式が、最も伝統的な行政的語彙に意図的にそれを結びつけたのである。実際のところ、北海道の語の起源はより複雑なものである。明治より前には、この島は日本人に様々な仕方で名指されていた。ワタリシマ、コシワタリシマ、エゾ、エゾガシマなど。この呼称でもっともよく用いられたのは、19世紀には蝦夷が島であり、つまり、「蝦夷の島」(すなわち野生の島)である。人びとは、その呼び名が島の非日本的で非文明化された性格を強調していたので、潜在的な植民者と同様に外国の威力に対しても、この島は植民地化の計

画にはあまり合わないと思われていた。そういうわけで、新政府の最初の仕事の一つは、この領域を改名することであった。そうするために、人びとは探検家で、地理学者で、民俗学者でもあった松浦武四郎(1818-1888)の助言を求めた。彼は6つの名前を候補として提案した。ヒタカミ、チシマ、カイホク、トウホク、カイトウ、ホッカイである。採用されたホッカイの中で、音声学の表意文字によって表現されたカ-イは、松浦によれば、アイヌが彼らの地に与えた名前であった。カ-イは、また、音声学的には、訓読み(日本語)した「蝦夷」から読み取れる表意文字の音読み(中国語的な日本語)でもあることに気付くことができる。ホクについて言えば、それは単純に「北」を意味する。ホッカイのなかには、このように、被植民者と植民者の視点の融合を見ることもできた…。しかし、政府は用語の日本化を強調し、カ-イをカイ(「海」と置き換え、「ドウ」(「道」「地方」)を付け加えて、国の伝統の行政的な語彙に同化した。この同化の意思に目的がなかったはずはないことは、上に見た通りである。今日、専門家でなければ北海道の語にアイヌの要素を知覚することはない。

北海道の他の地名は、一般的にそこまで複雑ではない。それはアイヌ語であれ、日本語であれ、中間的なカテゴリー(翻訳や音声学的な同化)であれ、よりはっきりと帰属している。なので、北海道の地名の日本化の度合いは、ある程度確定的に図ることが可能であるだろう。それでもごく最近まで、この問題には取り組まれていなかった。地名の3000の標本(つまり北海道をカバーする272枚の5万分の1地図にある地名の27%であり、しかも通名については非常に少ない)でみるなら、次のような比率が読み取れた¹⁾。

1. アイヌ地名：53.3%
 - 内訳
 - a. そのまま(音声学的な標記であるカタカナ)：7.3%
 - b. 同じ音での表意文字に置き換えたもの：44%
 - c. 同じ意味での表意文字に置き換えたもの：2%
2. 日本語地名：46.7%
 - 内訳(起源別)
 - a. 起伏や風景：11.7%
 - b. 植物相や動物相：4.3%
 - c. 道路など：0.7%

- d. 宗教：1.3%
- e. 歴史、制度：0.5%
- f. 産物：2.3%
- g. 縁起：15%
- h. 人名：5.3%
- i. 移転させた地名：3.6%

このように、アイヌ語の地名のネットワークはいまだにわずかに優勢である。それでも、二つの現象に注意する必要がある。まず、かなという音節文字の音声学的な同化力は、アルファベットの筆写をかなりの程度上回っている。というのも、かなは外国語を日本語に存在するシラブルにし置き換えないからだ。(girlやMacArthurをガール、マッカーサーと書く。)また、アイヌ語の地名の大多数は表意文字であらわされており、北海道の例ではカイが「海」となり、もともとの地名とはほとんど関係のない意味論的なつながりを生みだしている。つまり植民者の社会による心理的なカテゴリーへの地名の同化は、アルファベットでの筆写に比べて二重に加速化されている。

そういうわけで、北海道の地名は特別なしるしを保持している。その変わった音、難しい読み方は、日本の他地方の居住者をしばしば困惑させており、植民地化より前のこの島が外部的であったことをたやすく想起させるままである。明治まで、実際のところ、この島のほとんどすべての地名(南西の沿岸を除く)がアイヌ語であった。簡単にアイヌ地名の大きな特徴と、その日本化の過程を分析してみよう。

アイヌの地名は、日本人とはかなり異なる形での空間構成に対応していた。その証拠に、今日でも、山岳地名にはカタカナのまま読み替えられたアイヌの用語が非常に多く残っている。山岳空間はアイヌの日常世界の一部をなしていた一方で、日本人の植民者は平野に興味をひかれていた。アイヌ語の地名の厚みは、水の流れについても目立っている。今日でも、それは一ベツや一ナイという地名がよく出てくるところに表れている。非常に小さな流れであっても名前が付けられていた。大きな川が複数のコタンの領域を横断するときには、川は水源から河口まで複数の名前を持っていた。

大きさの秩序は地形の計測によるものではなく、特別な世界観に関わっていた。「大」や「小」などの付属語が良識に関わらず割り当てられているように感じ得るようになるもの、ある「大きな」川が「小さな」川の支流でしかないことがあり、ある山の山腹の取るに足らない隆起が「大峰」と呼ばれているなどもあ

る。場所名詞学は、つまり、伝統が大部分失われているだけにますます難しい、この地名学が支配する心理空間を取り戻さなければならない。たとえば、風景が生き生きしているとしたら、その構成要素はオスとメスに分かれており、その要素は人間の身体の部分に同化されていた。確かに、たくさんの地名学がその例を提供しているが、一般的には語彙としての価値しかないのに対し、アイヌ社会においてはこの価値は物理的な生活を直接支配するものだった。

この心理的秩序も、それが基礎づける物理的な組織も同様に、日本社会には識別できなかったことは言うまでもない。植民者にとって、アイヌの地名は自然環境の要素としてのみ存在していた。同様に、自然を改変したために、日本文化の秩序において場所の名前を置き換える必要が生じた。

すべての外国語と同様に、アイヌの言葉は日本語ではかなの二つの音節文字の一つ、カタカナで書写される。角張ったカタカナは外部性、日常から離れる(離そうとする)ことを暗示している。結果として、北海道の空間の心理的な占有は、場所の名前がカタカナで書き続けられる限り達成されなかった。そのため、政府は現地政府にアイヌの地名を本土の地名と同じように表意文字で書写するように命じた。二つの道がありえた。より迅速なのは、アイヌ語地名を適当に選んだ同じ音の表意文字で書写すること(「当て字」と呼ばれる)だった。もう一つは、その地名を同じ意味の表意文字に直すことだった。

この二つ目の道——意味論的な書写をすること——は、先住民の世界観を植民者のそれに可能な限り統合しようとする欲望を証明するものであった。しかし、それはアイヌ語との関係がない発音にすることから不便を伴っていた。こうして、滝川市(日本語では「滝のある川」)は、アイヌ語のソラブチから翻訳された名前である(逆に、ソラブチは音声学的には地方名や川の名前である「空知」のなかに取り戻され、適当に「空一知識」と書写された)。そのそばにある「砂川」(日本語では「砂がちの川」)もまた翻訳であり、アイヌ地名は「オタウシナイ」である(これも「歌志内市」の名前に取り戻され、「歌、意志、内側」と書写された)。

時には、日本語の書記は意味論的な要素と音声学的な要素に分かれた。たとえば赤平は、赤(色)がアイヌ語のフュレから訳されており、ピラはアイヌ語のピラからとられた。ピラはアイヌ語で「崖」を意味しているが、採用された表意文字は正反対の意味(「平」)を持っている。「険しい」という意味を持つピ

ラと同じように明らかな誤訳は、古日本語に存在しており、九州から東北まで、複数のよく知られた山岳地名、またたくさんの方言の形態に残っている。ピラを「平」を意味する表意文字で書写することは、アイヌと同様に日本の農民をも書写役人と分別する文化的な溝を示している。

この種の誤訳は数多い。こうして旭川は、「日の昇る川」と書くが、アイヌ語のチュプカベの逐語訳である。しかし、もともとの地名では実はチュベはすなわち「急流の河」であった(それはそこから遠くないところに現在「忠別川」として音声学的に取り戻されている)。

しかも意味論的な書写は少数のみである。行政が二つの文化を分ける溝を埋めるための努力をあまりしなかったことを意味している。

同じ音で表意文字に置き換えること(当て字)は、断然、植民地化の地名学においてより用いられた方法であった。それは翻訳の問題を避け、ある種の口伝性を可能にした。

「当て字」は、本来、指示されたものとの意味論的なつながりが無い文字からなる。実際には、その選択は外観ほど恣意的ではない。それは語彙を秩序付ける慣習に従っており(ある種の文字が音声的な書写であるにもかかわらずより頻繁に用いられている)、それを選んだ個人の選好を伝えている。つまり北海道に用いられた当て字から、植民者の心性、特にこの島を再命名する役割を担った役人の考えを分析することが可能なのではないか。こうした研究はまだなされていない。少なくとも、いくつかの特徴が最初から明らかである。

その中で最も驚かされるのは、難しい読み方が頻繁に表れることである。確かに、本土でも、地名に用いられる表意文字は、明らかな場合や一般に周知の事例以外は、確かな読みとは言えない。しかしここでは、破格の読み自体が慣れ親しんだ解釈のメカニズムに結びついている。北海道では、逆に、地名の起源が意味論的音声的に外部に根を持っている。この元から狂わされる基礎が民衆層ではなく、エリート層(行政)の心理メカニズムに結びついた書写に接ぎ木されたのである。結果として、(究極的には孤立した行政官の気まぐれによって決められた)「当て字」の逸脱の程度は、長い民衆の歴史の篩にかけられるよりもずっと目立ったものなのである。土地の現実から二重の意味で分断されて(非アイヌという意味でも、多くの植民者とは異なるエリートとしても)、想像力の溢れた命名者たちはしばしば難解な傑作を残した。たとえば、あちこちにある「ベ

ツ」(アイヌ語のベツ、すなわち「川」という要素、一般には7画の非常によく使われる表意文字(「別」)で書写されているが、それは必要があれば——胆振の壮瞥(そうべつ)のように——平均的な日本人には読めない17画の非常に珍しい表意文字(「そこに目をやる」の意)にもなりうる。トあるいはトウという要素(アイヌ語の「湖」)は、場合によっては2画(十)、6画(当)、8画(東)、9画(洞)、12画(統)、13画(遠あるいは堰)、17画(濤)、21画(鑄)などの表意文字であらわされる。

このように逸脱があるので、時にはもともとの読みが誤った読みに従って、慣れ親しんだ心理メカニズムに近づくこともある。その場合、最初の音声的な起源との関係は失われる。今日、そのような書記を勇足(ゆうたり)がもともとはイサミタリ(アイヌ語ではエサンピタラ)と読まれたことに見ることができる。あるいは、幸震(きつない)が同じ漢字の音読みでコウシンとなったこともある。実際、音読みでの発音は争いのある読みの場合に最後の手立となっている。

思いつきであるにもかかわらず、音声的な書写である当て字は一定の傾向を示している。音威子府や訓子府などでは、プ(府はつまり「政府」)は最も伝統的な行政的語彙に帰される文字である。北海道の道と同様、それは国家的な型への同化の明らかな意志を示している。逆に、民衆的な現実への同化は、札幌のそばの手稲山のように、「米」にかかわる(イネカイナ)文字に見られるたくさんの地名のなかにある。そのうえ、手稲は地名の二つの層の間にある分離を示している。というのも手稲(アイヌ語では「ぬかるみ」)は平地の地名であり、日本人がそれを囲む山に適用したのに対し、アイヌ語では、タンネウエンシリ(険しい長い稜線)と名付けていた。同種の転用は有珠山の事例にもあり、日本人はそれが見下ろす湾の名前(日本人は内浦という非常に日本的な名前をそこに与えている)を採用している。寿都や留寿都において、「ツ」(京都の「ト」)に当たる文字は「首都」を意味する。つまり寿都(後志)は「長寿の都」であることを示しているのに対し、アイヌ語の語源学においては、シュピキベは単純に「ヨシの多い川」を意味している。またしばしば(和寒、和琴などのように)「ワ」と読まれるものは、大和とも読める文字である。これ以上はつきり表れる日本化の意思はなからう。既に述べた幸震、別名コウシンでは、サツやサチ(アイヌ語ではサット)は「幸運」で表記する。そこから重要な一連の有益な地名が加わり、また純粋に日本の地名も加わり、幸震は1943年に大正と改

名された。

この音声的な書写の検討を、表意文字によってすべて日本化されたものであっても、アイヌ語の地名はすぐにそれとわかるほどかなり変わった音を残していることを強調して終わることにしよう。この視点から、北海道は日本の他の地域とは依然として異なっている。

日本の地名は、おそらくアイヌ語起源のものほど多くはないが、時代を経るにつれ広がっている。それは、圧倒的な割合において元からの日本人によって住まわれている場所がそうであることで残っていく。都市化によって、地名の生き生きとした骨組みは、複雑化し、また多様化して、今日はほぼ全くの日本語となっている。ここではその占有の機能については強調しないようにしよう。この機能はすべての植民化において表されており、少なくとも以前の地名のネットワークがおそらくはあまり密ではなかった北海道の平野においては、それが広がるのは不可避であった。それは、植民者が地域性や出身地域(山梨や福島など)の地名を複製している地名においては特にはっきりと表れている。占有の意思は、自分たちが落ち着く場所を自身で生み出した植民者から、1910年にヌタク-カムシュベを旭岳と改名した省令——それというのも学校の教科書において北海道の最も高い頂がアイヌ語の名前を持っているなど考えられなかったのだ——に至るまで、植民者の社会の全てのレベルで表明されている。

国家から住民まで

イメージというものは、それを掻き立てた素材が消えたり、変わったりした後も、長く残りうる。にもかかわらず、植民地化が招いた変化は、イメージの新たな層を生み出し続けている。そしてそれは、古いものを常により神話的な次元に追いやる。この問題は、社会構造の分析から分離しえない。社会層には心理的な層が対応しており、しかも直接的でも干渉を免れてもいない関係にある。一方が他方に相互に影響を与えるが、すべてが異なる速度で進展する。ある例を通じて、調整を外し、再調整する、この永久の運動の力量を見てみよう。

中央政府、つまり社会的なピラミッドの最も高いところからみると、北海道、今日でも明治時代のように北の島という意味になっているが、それは国のあまり重要でない一部である。しかし、植民者、後には住民の末端にとっては、この島は知らないものの両極端から日常の両極端に変化した。社会レベルの下層における心性の中で作り出された変化は、中

央権力のレベルで作られられた変化とは全く共通することのない作用であった。この両極の間で、あらゆる可能な結合が重ねられ、また絡み合っている。

要するに、北海道のイメージは無数に存在している。このイメージのそれぞれが空間の物質的な構成に別の形で響いている。その中で最も神話的なもの(つまりローカルな現実から最も離れたもの)は、この構成に最も影響していないものではない。実際のところ、中央権力、つまり地理的にも社会的にも心理的にも、北海道の住民の日常的な現実からは最も遠く離れた機関が、北海道の空間の着想や物理的な構成に最も決定的な行動につながる引き金を握っていた。つまり金(開拓使の工場から根室の新酪農村まで、公的機関の役割がどのようであったかを見ることができた)も、権力(行政、軍、屯田兵を通じて)も、思想(たとえば明治時代の歴史教科書など)でもある。

この抽象的な表現とその物理的な影響についてまさにあてはまる例がある。「碁盤の目」と呼ばれる格子状の道路配置は、植民地化の大部分を秩序付けた。碁盤の目は着想されたものから物理的な計画へとスタイルを直接移し替えたものである。それは一つのイメージ(幾何学的な図式)を自然空間に押し付け、この空間からそこにあった不規則性を分離した。北海道では、合衆国ほど抽象化は進められなかった。というのも、格子組の向きは単一ではなかったからである。[とはいえ]それは碁盤の目によって作り出された空間の性格をほとんど和らげなかった。つまり、それは上から見た空間であり、生きていく中の不完全性を排除したのである。それは国家が考えるような空間であり、ローカルな構成の重みはこの着想を変えるには不十分であった。というのも、見てきたように、アイヌたちの空間の物理的な構成は、日本の国家がこの島に形成していた表象において全く意味をなしていなかったのである。

また日本社会の場合に限ってみると、北海道の植民地化の歴史がよく示すように、住民レベルで作られるのは[公式のものとは]違った空間である。碁盤の目が一般化する前(1890年)に、あるいはその余白部分においては、植民者はより自然に近い不規則な空間を作り出した。相関的に、地名はこちらとこちらのシステムでは異なっている。碁盤の目においては、地名の手がかりは碁盤の目自体であり、つまり抽象的である。碁盤の目の外では、手がかりは自然やそこに住む人間たちである。

中央権力の役割は、場所を見分け、描き、名づけることにはとどまらなかった。北海道の空間を作り

出す中で、屯田兵の象徴的な機能をも考慮しなくてはならなかったのである。複数の地域において、植民地化は軍服の下で始まった。基幹要員(国の軍隊)が実質(ただの植民者)に先立っていたことは、おそらく住民の心理の上に作用しなかったわけではなかった。北海道民が時折見せる相対的な無責任さ、ある種の欠乏などを覆うために国家の援助にかなりゆだねる傾向が、その根をここにある程度持っていることはまず確かである。国家的であり本国的でもある強い基幹要員が支える植民地社会の典型であるこの特徴は、具体的な措置のための全ての道具によって強固にされていた。大きな鉱山会社の奉仕のために明治の国家によって提供された徒刑囚、あるいは今日でも、根室の新しい開拓の中で設立される畜産業者が享受する財政援助がある。この事例でも他の事例でも、国家の庇護は選択的である。徒刑囚の雇用主になれたのはすべての起業家ではなく、45万フランのターンキー農場[すぐに使える農場]を受け取るのもすべての畜産業者ではない。エリートのみである。

社会構造やより物理的な空間整備の分析から象徴の分析を分離してはならない。次のような問いを投げかけることに根差すものである:空間の構成の公式原則は住民のふるまいにどのような影響を及ぼしているのか。たとえば、北海道の大平原では、冷たく見慣れない幾何学がその場に最も支配的だという事実は、空間がそこでは住民よりも国家によって適合的にされたことをいつも感じさせる証であるが、それは農村からの移出が日本で最も高い割合であることが示される場所にある社会の、この愛着のなさを説明するのに役立つのだろうか。この場所への愛着の弱さと碁盤の目の空間が、原則的には、中心をずらし、地域色を除去する(平行線が無限につづくのみであり、直交する交差点が無限に繰り返される)という事実に関連はあるのだろうか。この問いは、このようにだしぬけに出されると、無意味に見えるかもしれない。この関係は社会文化的なすべての複合の一面にすぎない。しかしそれは、この問題を検討するのを妨げない。

最初の論拠はこうである。碁盤の目のまっすぐな眺めの冷たさは、他の空間において形成された時にしか感知されない。簡潔な個人調査の結果を信頼するなら、北海道の住民はそれを感じることはなく、少なくともそこから影響されているとは思っていなかった。しかし、同じ住民が一般に異なる空間の質を肯定的に感じ取っていた。東京の曲がりくねった路地や、本土の農村風景の不規則性などである。そ

これは北海道の風景のあまりに視覚的に概念的な決定が——フリーエがアメリカ都市について告発したこの「視覚と理性の反自然的結合」——住民による周辺環境評価に否定的に働いていることを証明しているかもしれない。それは(国家によって)着想された空間を(住民によって)生きられた空間から抽象化した歪みの兆候として解釈され得る。

碁盤の目の空間において生に対し着想がはっきりと優位であることは、時間的には千年以上離れているが、京都などの条里制や直交する計画という先例が繰り返されているように見える。そこでは、確かに、何世紀もの古色が当初の型の冷たさをより補ったのは事実である。北海道はまだそこからは遠い。ともかくも、碁盤の目の抽象的な秩序は、日本のほかの都市や田舎の大部分における空間の構成原理とはっきりと対照されている。そちらでは、原則は合理性の要求ではなく、住民の具体的な生の機能において秩序化されており、つまり演繹ではなく経験によってそれを見出している。名前を持つのは街路、外部の場所や別の外部に導くものではなく、街区、区画、敷地といった内部の場所である。家への付番は街路によって強制された公式の秩序ではなく、最も古いものから最も新しいものへと、それが建設された実際の秩序によっている。そこから生じる外見的な無秩序は、空間の構成における生の着想の優先性の最も明白な外観にすぎない。しかし北海道では、それは全く逆である。確かに、与えられた空間の生成がどうであれ、時代を経るにつれて生の割合はそこで必ず大きくなる傾向がある。最初は京都や条里制がそうであった抽象的な着想がその例であった。しかし、当初の決定の跡は残る。

生きられるより前に着想された、上から見た空間、北海道は、遠くから見られた空間でもある。明治以来、この島は権力の意図とローカルな社会の現実の不均等によって特徴づけられ続けている。植民地化の目的は部分的にしか実現しなかった。そこには日本ほど一貫した社会においては偶然以上のものがある。この不適合性は、この島が、国家がそれを見るものというだけではなく、東京では感知されなかった別のものでもあることを外示している。首都からみると、北海道は周辺空間でしかなかった——他方でそこに住む人びとにとっては世界の中心であることは言うまでもない。高度成長下で適用された整備計画は、たとえば、特に名指して北海道を、ほかには九州と東北も同様に、「遠隔地帯」として扱っていた。この「遠隔性」は中心、東京—大阪大都市との関係で決められていた。このように境界を決めら

れた空間の「役割(「分担」)」が結果として割り当てられている。高度成長の間、またそのために着想された計画が最近見直しの対象となっていることは、まず、目的の削減、つまりある仕方においてローカルな生を考慮して国家の着想を適応させることとなって表れた。それでもやはり、二つの言葉のずれは北海道において日本の他の地域よりも常に多く出てくる。1969年の整備計画(新全総)が目指した巨大コンビナートの中で、苫小牧のものが最も巨大であると同時に最も工事が進んでいるものであり、ほかの地域では決定的に縮小するほかはローカルな環境においてこれほど異様なものを押し付けるのを最終的にあきらめたのは偶然ではない。

もちろん、日本社会による北海道の心理的な占有は、一方で住民にとっての事実、他方で中央権力にとっての事実の二極だけではない。それは国民の総体にとっての事実である。しかし、北海道を書いたある種の歴史家、あるいは文学的歴史家の出版物のなかに北海道のイメージの変化を辿る研究の素材を見出すことができる。そのような人に森山軍治郎がいる。この人物は特に、農民や漁民によって書かれたいくつかの俳句(短い詩)に表れるイメージを都市部の文学サークルの中で同時代に生産された俳句と比べることで分析した²⁾。そこには、伝統的な紋切り型の保存や変化が、社会層によって同じリズムで運用されるわけでは全くないことがよく表れている。農民の俳句は、支配的な型へのより際立った従属をする(書く表現の規範に対してエリートと同じ自由は享受していない民衆)と同時に、矛盾しているが、自然環境の変化をより迅速に受容することを示している。イメージの層は都市と田舎では異なる論理に従って変化する。植民地化のはじめには、伝統的なイメージがそちらでもこちらでも圧倒的に蔓延している。しかし、少しずつ感覚は変化するのであり、それはまずは田舎においてである。森山はたとえば、20世紀の初めごろの俳句において雪に用いられた用語を分析する。都市(小樽など)では、その用語は伝統的な紋切り型からほとんど変わっておらず、雪は繊細ではかない花のように寿がれている。それは穏やかな気候の国の文化に固有の見方である。このようなイメージと北海道の現実の間の矛盾は際立っており、ここでは1年の4か月から6か月の間、雪はやっかいもので脅威であり、それは常にそこにあり、冷酷で、時には死をもたらす脅威である。確かに、俳句は極端に厳しい決まりのある文学の一分野である。それでも、田舎の詩人たちは、彼ら自身で、伝統的な祝賀にとどまることをかなり早

く止めている。彼らの語る雪はそこよりかなり北方との整合性を持っている。それは、心理的カテゴリーが、社会構造の機能で変化すると同様に、自然環境について社会層によって維持されている関係の形からも変化するという証拠である。森山は、この方法で、北海道の環境における特別な農民文化の初子を探索することにこだわっている。しかし、この文化はすぐに政治的社会的統合の進歩、特に徴兵と就学が引き起こすそれによって押しえつけられることになる。この押しえつけは民衆的な俳句においては強く影響し、再び支配的なイメージの調子になっていく。そしてそのイメージはどんどん政府のイデオロギーを反映していく。

このように、この一つの例から、社会による環境の占有と、環境への社会の適応、この二つの過程と社会の動態性との関係を、複数の次元と複数のレベルにおいて定義することができる。

今日の幾つかのイメージの社会的含蓄

離れていることと違っていることというテーマ

本州の住民にとって、北海道は切り離された世界のままである。

この見方はもちろん、実際に現実にある違いのいくつかに根差している。しかし、この違いはステレオタイプによって大きめにされており、その多くが否定的なものである。例として、北海道に配置された公務員は、普通の男性であれば、追放されたと感じている。このテーマは、意識調査でもフィクション(小説、テレビドラマなど)でも何度も繰り返されている。骨子は以下の通りである。「北海道に行くの?かわいそうに…でも元気出して!ねえ、そんなにわるくないよ、空気はよいし、緑はあるし…」このような非常に人気がある漫画(西岸良平『夕焼けの詩』小学館1975、p.167)は、自分がもうじき新しいポストにつくために北海道に行かなければならないという知らせによってうちのめされている一人の男を私たちに見せている。彼は悲しみをアルコールで薄め、心のうちを語る。「北海道に飛ばされるんじゃ。…この年で…」バーマンがポテトチップスをサービスする。彼は一層激しくうめく。「ポテト=北海道=左遷」。…左遷とは、同様の事例でしばしば用いられる語であり、「左の方に遷される」、つまり免職されたり、解任されたりすることである。北海道に関しては、実際には昇進であってもこの語が

使われる。(大会社の管理職たちにとって、札幌支店の長としての1-2年は大都市の権威あるポストの前に義務となるステップである。)またしばしば、より強烈な表現として「島流し」(島への追放刑)ともいう。それは力ある異端者にのみ課せられた運命であり、日蓮が1271年に佐渡に送られたようなものである。この語彙が比喩的な形で慣用化されていることは言うまでもない。しかし、それは慣用になっていて、特に北海道について用いられるのだ。

勤め人は北海道に転勤することに嫌悪を覚えるが、配偶者は一緒にそこについていくのをより恐れる。子どもの教育を邪魔しないことが本州にとどまる最大の動機となり、夫は不承不承、可能な限り短いことを祈りつつ、一定の間、北海道に向かう。ここからサッチョン、「札幌での独身」という人物像が生まれた。札幌の最初の音(サツ)と朝鮮語からとった「チョンガ(独身男性)」の合成であるサッチョンは、とくに妻を本州に残して札幌に配属され、すすきのという歓楽街の最上客となる男たちを指している。少なくとも、伝統はこのように運用されている。

遠いことと異質であることは、もちろん、肯定的なコンテキストも持ちうる。依田勉三のような、明治から今日までの多くの移民は、遠くであり、他所である必要によって移動してきた。旅行者が味わうのも、特にエキゾチスムや環境の変化なのである。「北海道の異国性」は、彼らを引き付けるプロパガンダのうち好まれるテーマの一つある。後で見ると、そこでは北海道の景観の非伝統的で西洋化された側面が特に強調される。

同じ意味で、北海道の北方性に価値をおいた思潮が強調された。この北方性は多くの人びとを今も怯えさせる。この思潮は二つの構成要素からなる。一つは通俗的に観光的なものであり、雪やスキーや流水、札幌雪まつりなどであり、地域の特性を商業化するのみである。もう一つはより複雑である。二つ目の観点はまた、北海道民にとって首都に対抗した独自性と解放といったある種の渴望と同時に、「北方圏(すなわちシベリアのガス田、アラスカの石油など)に向けた日本の顔」という主題での首都による利用でもある。

二つ目の観点の二つの側面は、相容れない質からなるにもかかわらず、それぞれ全く区別がつかないものである。一つは内側から見た北海道の表明であり、もう一つは外(首都)から見た北海道の利用である。「表明」あるいは「解放」という側面は、太古の記憶と同時に榎本武揚の反乱や「北海道の独立」に関するすべてのイデオロギーの記憶とつながっている。

後者は、河野廣道による『北海道自由国論』(1946)という本によって描かれている。この「独立主義者」の傾向が概して噂やフィクション(なかでも夏堀〔正元〕の短編集『幻の北海道共和国』)にとどまったことを確認しておこう。北海道のたくさんの知識人が文学サークルを越えた北海道の文化を定義しようとし、常に繰り返され、おそらく無駄に終わっている…。にもかかわらず、そこには、北海道の北方圏との関係を強調する、頂点から来たイデオロギー的なキャンペーンがくっついている。北海道新聞(最大の地方紙)は、情熱的な推進者となっている。北方の国々についてのたくさんの記事やルポルタージュ、そして北方圏において北海道が果たすべき役割というテーマについて行われた懸賞論文などがその証拠である。

しかし、では、どんな「北方圏」について議論しているのだろうか。空知の稲作者からラップランドのトナカイの飼育者まで、関係ははっきりしていないように見える。他方、はっきりしていることは、北海道の空間を特別視する意志であり、北太平洋圏とシベリアに対して日本の政府と資本が持っている関心である。暗示的なのは1976年の秋になされた決定であった。日本とシベリアとカナダとアラスカとの貿易を促進するために、北海道に「北方圏リサーチセンター」を創設したのである。ここまでくると、「北海道文化」から遠く離れ、テクノクラート式の「地域の使命」となる。

西洋というテーマ

このテーマは北海道のすべての神話の中でもおそらく最も意味深長である。それは日常的に使われるたくさんの紋切り型に分化し、職業的な判断の多くを決定している。北海道の開拓を可能にした技術において国内の基盤と西洋がもたらしたものそれぞれの割合を定義するのはもう少し先にしたい。西洋の影響は一般に考えられているよりもずっと少なく、とりわけ人びとが西洋の影響に帰したがる道に北海道が従ったというところからは程遠いことを見て取れるだろう。技術についてはまだよい。しかしある人びとから見れば、西洋の影響を受けたのは社会構造までだという。そのような社会学者が、時代のせいもあるが、開拓使の下でかかわりを持った専門家のバイアスによって「アメリカの農村のそのまゝの社会形態が移植された³⁾」とすっきり書いている。そしてこの社会学者は最初ではない。それは日本一般について、またとりわけ北海道について非常に流布した、近代化と西洋化の混同の典型例である。非

常にはっきりしたいくつかの偶然の一致を探知して、社会史の重厚な層を軽々と見過ごした類似による入れ替えを行っている。

通常のイメージは次のようなものである。北海道の自然条件は日本のほかの島とはあまりに異なっており、開拓するために明治の初めに外国の専門家を招聘しなければならず、その影響は今でも明らかで、北海道は北ヨーロッパを縮小したものであり、新イングランドあるいはさらにカナダのミニチュアだと。

このテーマは多かれ少なかれ北海道に関する文献に深く浸透している。すでに引用したフォドルのガイドブックにはっきりとした表現がある。372頁に、植民地化の開始直後、「外国の援助なしにはやりきれないことが明らかになり、ありがたいことに「賢明な統治者が続いて」、アメリカの専門家を招聘したとある。この文章は確かに西洋のものである。しかし、日本人が埠外にあるわけではない。北海道新聞では、アメリカ合衆国200周年を記念して、多くの広告記事が集中投下されたのを見ることができた。それぞれに英語のリード文がついており、それは4.5cmもある文字で書かれている。「クラークさんありがとう」「ケブロンさんありがとう」など、そして最後に「アメリカの皆さんありがとう」で締められている。それぞれの広告がまるまる1ページ占め、4分の3にそれぞれのテーマ(ケブロンの役割など)が書かれ、残りの4分の1にはそのメッセージを載せた企業名のリストがある。このシリーズは1976年の広告賞を受賞した(それはさらなる広告のきっかけになった)。北海道民の集合的な無意識へのインパクトを測るとおもしろいのではないか。北海道新聞は80万部刷っている。言えることは少なく見積もって、明治時代に海外から招聘された顧問の業績が人びとの心に現前するようにしたということだ…。

西洋化というイメージの型、それはもちろんアメリカ式の開拓者である。それはあまりに確実に流布しているため、根釧台地の畜産者を好んでカウボーイと紹介し、さらには後者もそういうものとして自分をみるようになる。こうして、NHKがこの地域の若い農業者を取り上げたテレビ番組の中で、彼らの一人が、西部の衣装を着てスタジオに現れ、アメリカに行くという夢を放送で振りまいていた。確かに、カウボーイを演じる若い人びとがいるのは北海道だけではない。しかし、社会がそれをある地域全体の特徴としてみたがるのは北海道だけなのだ…。

この北海道の神話における西洋というテーマの異様な強さは、歴史的に定義された政治の産物以外の

何物でもない。a) 体制を正当化するための明治の指導者の努力。b) 彼らに続き、エリートたちによるこのイデオロギーの普及。c) その後の旅行会社による、さらにd) もっともありきたりな資本主義(上で見てきたような巨大広告を促進する企業、そういった企業は産業と商業のすべての広がり配分されている)によるこのイデオロギーの回収。

節目はa) 開拓使による西洋化という選択によるものである。外国人専門家(アメリカ人だけではなく、西洋人だけでもなかったが、今日では誰もが中国人の協力を忘れてしまった…)の配置、西洋の農学を教える札幌農学校の創設など。植民地化の研究は、少し詳しい歴史の本の全てのページで、この西洋化という選択の結果が平凡なものであったこと、そして移民によってもたらされた伝統的な(旧習的なという意味ではなく、民族的なという意味において)流れとの比較において、比率として限定されていたことを示している。

しかし、b) この政策は公式の言説や教科書などにおいて何世代も称賛されており、絶対的な支配力を持った神話を樹立した。北海道大学(前身は札幌農学校)はこの神話化の重要なエージェントの一つであり、自身がそれを正当化した。こうして、出版物の一つのなかにAmerican influence upon the agriculture of Hokkaido, Japan (1915)がある。そこには「北海道は非常に多くアメリカを連想させる」(p. 1)「これ(耕作地の広がり、筆者注)は農家にアメリカから多くの農業改善策を輸入させることとなった」(p. 7)「実際のところ、北海道の農業の方法は当初アメリカのシステムを小型にしたものでしかなかった」(p. 10)などとある。米という語は一言もない、米は当時も現在と同様に北海道の田舎では畜産を含めても一等の産物であったのに。「北海道農業」としてここに紹介されていることは、農学校の農業でしかない——さらには、はっきりした神話の恩恵によって整えられ、図式化されたものである。この文章は、ついでに言うなら、西洋に読まれ、賞賛されるようにわざと書かれたものであり、西洋はあまりにしばしば日本をこの種の書類を通じてしか認識せず、あまりに長い間そこに自身の有利な点を見出したのである。

次の節目、c)とd)は、メディアの日常的な現実である。ばらばらに引用してみよう。国鉄(国有鉄道)の広告では、北海道の風景の中において、日本を平凡に思い出させるすべてのものが慎重に削除されている。サッポロビールや雪印の牛乳の箱にある英語で書かれたマーク。以下の常軌を逸した断言「余市

はスコットランドに似ているという。」は、1976年7月号の『るるぶ』でニッカウイスキー(余市でつくられている)の見開き広告に太い赤字で示されている(若い女性たちのための旅行雑誌——ウイスキーはパパに持って帰るお土産であり、スコットランドの夢が彼女たちのためにある)。この北海道の素晴らしい写真がたくさん載ったアルバムのようなガイドブックは、水田以外なら何でも載っている。子ども向けの地理学全集(『日本地理の図鑑』小学館1973)では、子どもに「北海道の農業の横綱(相撲のチャンピオン)は酪農です」と教えており、米は生産物のリストの終わりの方で述べられている(p. 144, p. 145)が、米は[実際には]最も多く作られており、酪農を引き離しているのに…。

要するに、日本社会の全ての層が北海道のイメージを生産、再生産しており、政治エリートの次元において一世紀以上もこのように練り上げられてきた。こうすることで、植民地化の過去の現実とその実際の帰結は消されている。

外国人の読者はなぜ北海道の西洋化されたという神話が日本社会において(別の場所ではその余波で)これほどのエネルギーをもって永続しているかを疑問に思うかもしれない。それは、本来、このイメージが明治の体制に徳川体制との対比において一線を画すことを、また特にこの場合、北海道を文明に開いた(開道)という功績を主張することを許したものの一つだったのだ。その後、公式の歴史がこのイメージを維持したのはわけのないことである。そして、この威信あるイメージが、「マーケティング」の時代に、大量の実利的なイメージにどんどん引き継がれてきたこともわけのないことである。この神話的な幹は、断定的なレッテル貼り、この傾向が個人やグループを激化させる規範的な型への欲求に向かうような日本の傾向によって、永続的に養分を与えられていることを付け加えねばならない。結果としてこの措置は、日本において、枠組みを与えることの伝統的な強さと全体性に反映されている。

パイオニア精神というテーマ

日本の全ての小学生は、クラーク博士が1世紀前に札幌農学校の学生に別れを告げながら発したというこのフレーズを学ぶ。「ボーイズ、ビー・アンビシャス！」それをせめて日本語で覚えている：「少年よ、大志を抱け！」

どういふアンビションなのだろう？出世主義者の粗野なアンビション(野心)ではない。高貴なアンビション、大きな計画(大志)なのである。そのモデル

は、「パイオニア精神」であり、誰もが知るように、アメリカの西部の征服が先行している。

このパイオニア精神は、原文通りに「パイオニア・スピリット」とか「フロンティア・スピリット」と呼ばれるよりは「開拓精神」と呼ばれる。しかし、翻訳は北海道の征服を可能にしたパイオニア精神が西部劇のそれと同じ性質からなるだけでなく、クラーク博士がその生みの親であることを疑わせはしない。北海道大学のキャンパスにおいて、胸像が彼にそれに対する感謝を示しており、遠くないところに彼の名を冠した建物[クラーク会館]もある。しかし、この胸像は観光的な巡礼の対象となり、あまりに熱心なので、大学は数年前に団体旅行には訪問を禁じなければならなくなった。その欠如はあまりに残酷だった…。1975年以来、札幌を望む羊が丘の上に、クラーク博士の大きな金色の像を見ることができている。今度は二本足で立っていて、とうとう広大な計画への人差し指を地平線に向けて示すことができている。彼がそのように西部を示していること(ゴー・ウェスト?)で気を悪くしてはいけないが、ここでは西は海であり、植民地化はむしろ西から東に進んだのだ…。隣地の駐車場は、数十のグループの同時訪問を可能にしている。翌年、1976年に、華麗なフィナーレがあった。1976年はアメリカ合衆国200周年と札幌農学校の100周年を同時に記念していた…。クラーク博士と彼を通じたパイオニア精神に触れた出版や番組、宣伝の燃え上がりに人は立ち会うこととなった。

クラークが札幌に数か月しかいなかったことを思い起こすのは無駄かもしれない。彼の存在は彼の歴史より彼の神話によっており、それはあまりに豊かなので聖人伝となっている。それは彼の学生や後継者たちがクラークの思い出に捧げた信仰から生まれた。彼らは植民地化による民衆の波と比べて、数としては微細なエリートたちである。しかし社会的な表れや、彼らの間の何人かについては、才能やエネルギーが、植民地化の歴史において、クラークのイメージを植民者の多くにとってはそうではなかったような存在になしえたのだ。このエリートたちのなかで、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾だけを挙げておこう。三人とも国際的な役割を果たした。他方、神話が根ざすのはクラークの弟子たちのなかの、まさにこうした有名人のなかである。農学校で学位を受けた大多数が、行政などの中で目覚ましいキャリアを形成し、植民地化の現実からそれほどまでに遠ざかっていたのだ。彼らの社会的な重みが増すにつれ、植民者への直接的な影響は減じていった。クラーク

のイメージは、彼らの名声を通じてあまりにふくれあがり、土地の現実をあまり重くないように見えるようになった。

では北海道の植民者のパイオニア精神とは何か? 黒田清隆のような全権使節の貴族から、元の土地からこっそり逃げてきて(「夜逃げ」)、土地台帳に載った格子状の土地の端(「区画外」)に落ち着いた名もない植民者たちまでいるような、社会的な広がりと同様に多様な現実がある。各社会層に、お互いにほとんど似ていない動機から生まれたパイオニア精神があった。

こうして、榎本⁴⁾が示したような貴族や軍隊の植民地化はおそらく特権的な保証によって活性化した。本土における落伍者、古い世界では等級の低い戦闘員たちが北海道でエリートとなった。しかもこのような動機は政府の意思とは必ずしも合っていなかった。それは、例えば当別で伊達邦直の一派を行動させたような、昇華された抵抗の精神なのである。

しかしこの分析は特権のない植民者の群衆を動かすエネルギーを考慮していない。この観点から、森山の解釈は社会的な現実により近いように見える。既にみたように、森山は(特に)民衆文学(農民の詩や日記)の研究に根差している。この分析から明らかになるパイオニアのイメージは、エリートの「フロンティア・スピリット」とは全く共通点がない。下っ端の植民者は自然に対してだけ戦っていたのではない——「大自然との闘い」は「フロンティア・スピリット」に帰属するテーマである。彼らは、市場経済の容赦ない要請、官僚の無理解や高慢さなど、社会とも戦っていた。生き延びるためのこの二重の闘いの中で彼らを励ましたものは、開拓の父や西部の征服といったイメージ世界とは何の関係もない。さらには、一般的に、クラーク博士がその弟子たちに吹き込んだようなプロテスタントの倫理でもない。森山によれば、彼らの心理的な基盤は、まずは家と祖先であった。努力と儉約(勤儉力行)によって、パイオニアは何よりも信頼を失わないこと、家門を汚さぬことを目指していた。そして祖先になしうる最もよい奉納は、自身の生を全うすることであった。生地を離れ、「蝦夷が島へ、海山越えて」(しばしば用いられる表現)向かったパイオニアたちを突き動かしたものは、おそらく、「一つには国家のため荒野を開拓し、一つは我身を立てて父母姉妹に孝養を尽⁵⁾すことであった…。

しかしもちろんそれがすべてではなかった。民衆の倫理には、服従と忠実という儒教の教えと同時に辛抱と粘り強さという仏教の理想が非常に浸透して

おり、それだけでエリート主義的な動機がなくとも植民地社会の動態性を説明することは可能である。大体が本土の社会的変化から弾き飛ばされた人びと（「食い詰めもの」「脱落者」）で構成された大多数の農民の事例において、その動機をどこに求めるべきだろう。論者のなかには、市場経済が育てた競争精神にそれを見出せると考える人びともいる。森山にとっては、そこに働いているのは何よりもまず、農民社会の伝統的な特徴、つまり「巧妙さ」（「創造精神」と「不服従」（抵抗精神）である。「巧妙さ」は明らかである。次章でその素晴らしい事例を見ていくが、そこには農民たちが開発した稲作の新しい技術があり、行政が稲作を放棄することをきっぱりと命令する場合にさえ用いていたのだ。これはしかも二番目の要素（不服従）にもかかわっている。この二つ目の要素は複雑である。実際のところそれは上記の倫理と齟齬を起こしているように見える。事実、それは大昔からの解釈のずれの問題であり、暗に陽に、どれが正当な道なのかについて農民層と支配層を分ける。農民の不服従という傾向は、基本的には正義の感情（「正義感」）以外のものではない。森山はこの解釈を様々な例から明らかにする。中山久蔵（石狩平野で最初にイネの耕作に成功した人物）のような人の創造性が、政府の指導に合わせて行動することへの組織的な拒否という見かけがありながら、実際に日本社会のより確実な伝統的価値に根差しているのを本書でもみていく。実は異端の開祖としてほど遠く、晩年になってから彼は、その間に西洋主義から揺戻した官僚たちによって称賛され、例として掲げられたのだった。

農民が開拓使の基本的な命令に従っていたとしたら、氷原にまで田を広げることにはじまる北海道の植民地化の最も目覚ましい偉業は決して起こらなかったことは確かである。本当のパイオニア精神は、もしそれを不可能に見えることを可能にする意志と定義するなら、それを確認できるのはここである。しかし、支配的なイメージ世界は正反対であるように思われる。それは型にはまった思考（西洋の技術を採用することの不可能性）、意気地のなさ（エリートたちによって認められた「大志」への恐怖）、盲従（大開発への個人的な冒険に身を投じることへの恐れ）、要するに、いなかっぺの退嬰主義という外見を取っている。

このように、パイオニア精神の一般的なイメージと北海道において現実にそれがそうであったこととの間において、不調和は深いように思われる。このイメージを持ち続けることは、誤読にしか行きつき

得ない。パイオニア前線の進展を保証した動機を民衆的な倫理や植民地化の社会的な条件に探る方がより実り豊かである。世界に向かって自分の自律性を訴える西洋の個人以外の何ものでもない極西部地方のパイオニアの型と、しばしば自分の属する集団によってパイオニアとして枠づけられ、支持され、生産された北海道のパイオニアたちの間には、根本的な不一致がある。極西部地方の定住者は、個人主義者である。北海道のパイオニアは、最後には集団である。（もちろん、北アメリカにも集団はあり、北海道にも個人主義者はいたので、傾向の問題である。）

クラーク式のパイオニア精神という大きなイメージには、しかし、これからも良い時期があるろう。結論の代わりに、証拠としてこの素晴らしい例を示すしかないだろう。A.トインビーは、『東から西へ』（1958）の中で、稲作をして仏教徒からなる西部と、牧畜をしてプロテスタントの東部の間に分かれる北海道について述べている。確かに、北海道の酪農家のパイオニアたちのなかにはたくさんのキリスト教徒がいる。しかし、最初の試みの時期が過ぎると、社会的な現実是非常に早くそれほど図式化しえなくなった。今日からは、東部に畜産家がより多くいるとしても、それはただ気候が米に合わないからというだけである。また北海道では宗教は等温線と直接の関係を持っていないようである。しかし、トインビーを魅了したイメージは、クラーク式のパイオニアにはつながらないが北海道の神話とあまりにもよくかみ合っている。クラークに何を負っていないのだろうか？既に述べた広告が言うように、「クラークさんありがとう、大志をありがとう」…！

自然と空間というテーマ

北海道のイメージは植民地化において全体的に維持されたのではなく、そうは全くなかった。そこには全く逆のことも含まれており、フォドルのガイドが書いているこの「未踏の自然」は、北海道は「何か粗野なもの、先史時代のもの」だと私たちに知らせ、「その支配的な性格は原始的であることだ」⁶とする。日本のガイドにはより誇張がないということは全くない。ヤマケイ（山と溪谷社）カラーガイドの『北海道』は——他の点では素晴らしく、良く分かった人々たちによって編集され、写真が撮られているが——北海道の「野放図な風景」を謳う解説から始まっている…。

北海道が日本のほかの島よりも人間化されない風景をより保っていることは確かに事実である。空地

も多く残っている。よりきれいな空気、高山の植物相、湖、熊、深い森などは、広告のテーマであるより前に現実である。しかしながら、興味深いのは、言語学者が換喩的に言うようなずらしによって、人は北海道に自然それ自体を見ており、またあらゆる象徴を伴ってそれしか見ない傾向がある。純粹さ、わざとらしさのなさ、自由さ、頑健さ、素朴さ、優しさ——これらのテーマの多くがパイオニア精神に帰着することを指摘しておこう——、広大さ、原始的であること、新規さ、将来性など。この広告が証拠である——何百もあるうちの一つだが、永井ほかすべて引用するように非常によくできたものである——「北海道へ飛行機でご招待！素朴、おおらかさ、広大、地平線、空間、原始、辺境、太陽と光と色彩、新鮮、開拓、野心、たくましさ、未来、詩情——北海道にはそれらすべてがある！」⁷⁾

「すべて」、これはおそらく7-8月に北海道にあふれる、日本中からのあの若い女性の群れが[それを]求めてやってくるものである。それは既に小説家の国木田独歩(1871-1908)が求めてやってきたもので、北海道に10日間しか滞在しなかったが、それでもなお『空知川の岸辺』⁸⁾についての小説を書き、そこで彼は「幽寂なる私語」と「生物を冷笑する自然の無限の威力」を感じさせる大自然について多く語っている。小笠原⁸⁾は国木田が持ち帰ったこの北の島のイメージを詳細に分析している。それはほとんど自然の表象である。しかし、国木田が非常に失望して出立したのに対し、詩人の石川啄木(1885-1912)はといえば、自分が探しに来たものをしっかり見つけたようである。彼にとって北海道の田舎は「しめやかなる恋の多くありさうなる郷(ママ)なり」であるようだ。都市とは言えば、「詩人の住むべき地なり」⁹⁾。しかも他では見つからないものを北海道で見つけるのは詩人だけではない。その人生の晩年に、哲学者の森有正は、北海道で夏に数週間を過ごす習慣を持っており、自然と、小樽のような街のそこはかたないエキゾチスム、毎日孤独の中で何時間も弾いたクラーク会館の大オルガンの美しさにひかれていた…。

同じような背景の上に、日本で最上の売り上げを誇る百貨店、三越は、1973年の秋の販売キャンペーンに「札幌のロマン」と名付けるところに基礎を置いている。この表現はほとんど翻訳不能である。「ロマン」とは、小説化された歴史であり、同時に物語風の雰囲気である。三越はつまり札幌起源の物語風の小説で包まれた商品を顧客に提案しているのである。日本の他の都市がそのようなマーケティングの効力を持つことはないようだ…。

こんな次元に達すると、北海道の神話は誰でも何にでも働きかけるような雰囲気を出している。人は単純に自分のところのないもの、あるいは自分のところにある嫌いなものの反対を見つけに北海道にやってくるのだ。そのとき、たとえば、北海道に汚染、混雑、都市化、まとめれば工業文明の逆を探している。そしてこのイメージは観光客や消費者や哲学者だけを動機付けるのではない。それは常にある程度の移民を維持している。この1972年のパイオニアがその証拠である。55歳(退職者)で大阪を離れ、〔北海道〕駒ヶ岳のふもとに定着しに来た。「逃げ出すしかなかった」、工場のばい煙や水の汚染など(1972年10月31日北海道新聞に引用された言葉)。東京の早稲田大学を辞めたこの教授もまた証拠だろう。48歳で十勝で農業者として第二の人生を始めるために東京を離れた…(1975年4月26日付朝日新聞に引用)。

日本社会の心理空間において、北海道は常に明治の移民が探し求めた「新天地」である。手の届くエルドラド〔黄金郷〕でさえある。なぜなら、北海道の釧路山からは1年に数kg以上は取れないにもかかわらず、北海道の金の伝説——12世紀にさかのぼる——は現在も生きている。毎月、釧路の譲渡願は百以上も札幌の釧路課に提出され続けている。「ゴールドラッシュの時代の、オトコたちの夢とロマンを再現しようではないか。もしかしたら、大雪の山中に砂金の山をみつけるかもしれないのだ。』『平凡パンチ』は読者に1976年夏に出版された北海道についての記事の中でこう提案している(『平凡パンチ』は若者向けのポルノ週刊誌)〔1976年7月19日号 p. 156〕。問題の記事は、ジャック・ロンドンの時代におけるユーコン地方の地図でもあるかのように北海道の地図で飾られていた。

実際、悪くはないのでは？人は探したいものしか見つけられない。(北海道を含む)日本が工業的で都市的になればなるほど、人は北海道に工場の前の、都市の前の、人間社会の前の大空間のイメージを探すのだ。そしてそれをよく見るなら、作家の八木義徳のように、「無に近い微小な一点」に変われるのだ(北海道新聞に1976年7月5日に掲載された記事『北の旅』)。

しかし自然と空間は、この逆の世界、大都市民が渴望する——夢に見る——このエレホン〔サミュエル・バトラーの小説のタイトルでnowhereのアナグラム〕なだけではない。それはまた、そういうものとしてそれらを商業化する観光や不動産の企業の非常に具体的な世界、あるいは固定資本への投資を節約したい産業の世界でもある。大都市圏の資本によ

る北海道の利用はまず、空間整備者や企業主が作り出すイメージによって決定される。たとえば次の逸話を引いておこう。1971年の末、住友グループの上級管理職たちが、グループ傘下の二つの炭田閉鎖の後、北海道に新しい工場を建設する可能性について調査に来ている。仕事が終わったのち、彼らは（道路の除雪のおかげで）この地域で冬でも運転することができることに驚いたと記者に打ち明ける。彼らが抱いていたイメージは——何千もの労働者の直接的な運命と、何万もの住民の間接的な運命がそこにかかっていたのだが——、北方の大自然のそのままであったようだ。しかし住友が北海道に根を下ろしたのは昨日のことというわけではないのだ…。同様に、1969年の整備計画によって予定されている巨大コンビナートのうち最も大きなものが苫小牧に配置されたが、計画作成者の目には、苫小牧は都市や住民である前に空間（安い土地など）と自然（豊かできれいな水など）であったのだ。続いた摩擦が、同じ社会において、社会空間と心理空間、支配的なイメージと地域の現実、構想されたものと生きられたものとを分ける不整合、そしてまた再調整の恒常的な動きを明らかにしたのである。

原注

- 3) 1975年の北海道地理学会の集会において栃木〔義正〕氏が発表したもの。
- 4) 森山軍治郎(1974)『民衆精神史の群像』北海道大学図書刊行会
- 5) 鈴木栄太郎(1954)「北海道だより」『村落社会研究』p. 237
- 6) 榎本守恵(1976)『北海道開拓精神の形成』雄山閣
- 7) パイオニアの日記からの森山(前掲書 p. 131)による引用。
- 8) フォドル・ガイド『日本』(1969年版) p. 371
- 9) 永井〔陽之助〕ほか(1962)『北海道』中央公論社 p. 4
- 10) 小笠原克(1973)『近代北海道の文学』北海道新聞社 p. 92
- 11) 小笠原による引用、前掲書 p. 14